

触覚鈍麻による更衣動作時の時間的变化と代償手段

作業療法士学科昼間部

【背景】

作業療法士が日常生活動作獲得のためにアプローチする際、障害により触覚鈍麻を呈する方に出会うことは少なくない。その中で在宅復帰するため更衣動作は必須であると考え、更衣動作は酒井ら¹⁾により、身体活動に必要な四肢体幹の運動機能や感覚および前庭機能、高次脳機能が要求される。このように様々な感覚が必要となるなか、触覚鈍麻によって起こる問題も多いと考え更衣動作に着目した。

【対象および方法】

本校の作業療法士学科昼間部に在籍する2年生、3年生の計34人を対象とした。今回は先に実験を行ない、その後アンケート調査を実施した。

実験は、2日間に分けて実施し、1日目の実験では閉眼にてテーピング無し、2日目の実験では同じく閉眼にて指先にテーピング3重巻きで行った。3重巻きで行った理由としては、触覚鈍麻を模擬的に作りだすためである。実験は丸椅子にて座位で行ない、前開きシャツを袖まで通してもらう。実験中に代償や発言などを記載する評価シートは検査者が評価を行なった。実験終了時には被験者に実験中の感情などを自由記述で記載したアンケート行なった。

【結果】

結果としてはテーピング無しとテーピング有りで大きな時間差が開いた。この差は約5倍であった。

また、その時間差が100秒以上かかると、テーピング有りの際、所要時間が多くかかった。実験終了後に実施したアンケートでの自由記述では不安やイライラなどのマイナスイメージの発言が多く見られ、達成感などのプラスな感情は少なかった。検査者が行った評価シートでは、テーピング無しと有りを比較するとシャツを張るという代償動作が多く見られたが、時間を要した人と早くできた人では代償手段の変化は見られなかった。

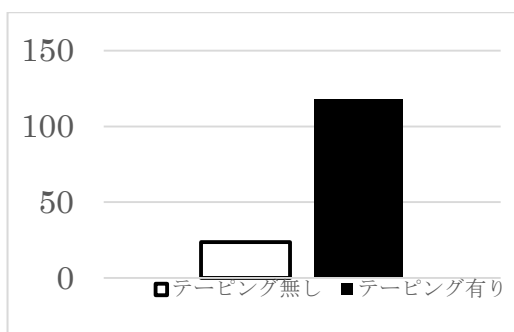
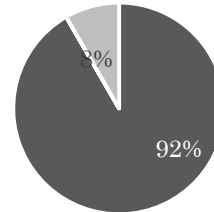


図1. 所要時間の差



■不安・イライラ・早く終わりたい・疲れ・ボタン着た...
■達成感

図2. 100秒以上差がかかった人の感情

【考察】

触覚鈍麻した際、更衣動作をおこなうと普段通りに行えなかったことからイライラ・もどかしさ・やりたくなくなるなどネガティブな発言が多く見られた。このことから精神的に影響を与え更衣動作への意欲低下につながるのではないかと考える。

精神的に影響があることでテーピング無しとテーピング有りでの所要時間の差が100秒以上かかると、テーピング有りの際、所要時間が多くかかったと考えた。特にシャツを張る行為は、わかりにくいボタン穴をわかりやすいように大きく広げたと考えた。このため、残存している触覚で穴が広がっているかを認知しやすくなると考えた。しかし、テーピング有りの際、時間を要した人とすぐできた人の代償手段に大きな変化はなかった。

このことから、アンケートの内容として指腹や指先など、どこを使ったか細かな質問欄を作ることで、今回より代償動作を詳しく見る事が出来たのではないかと考える。

【まとめ】

結果から触覚鈍麻によって所要時間がかかることで触覚鈍麻による問題だけでなく精神面への影響を及ぼすことが分かった。また、時間差は見られたものの、代償手段としては大きな違いは見られないことがわかった。そのため更衣動作を行う際に身体機能のみへのアプローチではなく精神面のケアも必要になると考えた。また、代償手段を用いる際にもその方にあった代償手段を模索して取り入れることが所要時間の軽減につながると考えた。

【文献】

- 1) 酒井ひとみ：作業療法学 3 日常生活活動。作業療法全書改訂第3版。11, 2016, 24-25.